

# Balance in Periodontics

はじめに

日々の臨床のなかで悩み、そして熟考を要する場面が数多くある。抜歯か？ 保存か？をはじめとして、切除か再生か？ 歯を削って連結するのか？ 単独で歯質を保存するか？ また、患者の希望と術者がベストと考えた治療計画との間に隔たりがある場合の対応。そして細かなところでは歯周外科時のデブライドメントはどの程度まで行うのか？ 再生療法後のリエントリーを行うのか行わないのか？ などなど例をあげるときりがないが、場面場面で両者のメリットとデメリットの“バランス”をはかり、より患者のメリットが大きい側を選択しているはずである。そしてさらに次のステップでも別の決断を迫られ、それぞれの判断に従って処置がなされ、また次のステップへ進んでいく。歯科臨床は、そのような選択の連続で仕上げられていくように思う。一つの判断の違いが異なる治療結果に結びつくことになるため、一つひとつの判断が重要になる。長期間安定し、術者、患者双方が満足する結果を得るためには、数多くの正しい選択のステップを積み重ねなければならないであろう。歯科臨床では“バランス”が成功の鍵となるといえるかもしれない。

本書では“バランス”がキーワードとなっているが、上記以外の意味での使い方もしている。それは歯肉と歯槽骨との両者間の関係を表わす言葉としての“調和”という意味での使い方である。歯肉は一定の形をとろうとするためその形態に調和した歯槽骨形態、言い換えると自然な歯肉形態と相似形の歯槽骨形態を獲得することが治療のゴールとなり、その結果長期間安定し、歯周病の再発が起こりにくい歯周組織を得られる。この歯肉と歯槽骨との調和した関係のことを、Balanced Osseo-Gingival Relationship (BOGR) と表現している。そしてどのようにして歯肉と歯槽骨の“バランス”を獲得するかについて多くのページを割き解説した。わかりにくく難しいと思われがちな歯周治療であるが（少なくとも私は大学卒業後10年ぐらいまではそう思っていた）、そこにあげている治療オプションを適切に応用することで、問題となる深い歯周ポケットは解決されることと思う。

そして成功の経験を少しずつ積み重ねていくことで、応用が利くようになり、難易度の高い症例も含めてより多くの歯周病患者に貢献できるようになるのではないだろうか。

近年大変な勢いで普及してきたインプラント治療の症例報告を学会や紙面上で目にするとき、天然歯を安易に抜歯しインプラントに置き換えているケースを見ることがある。治療計画がインプラントに偏った“バランス”になることなく、読者にとって本書が天然歯保存に対する努力のための一助となれば幸いである。

2010年5月1日

北島 一